

ヤヒヤ・シンワールの作品に見られるハマスの哲学

ハーニン・アウデッター著、Mondweiss, 2024年7月5日、協浜義明訳、田中一弘補訳

*脚注は訳注

自己犠牲、禁欲主義、安全意識という概念は、ヤヒヤ・シンワールの抵抗の哲学にとって極めて重要だった。10月7日に頂点に達した反乱は、彼の政治思想の直接的な応用であった。



2021年5月24日、11日間の戦闘の後、イスラエルとの停戦を受け、ガザ市の勝利集会に出席するガザのハマスの指導者ヤヒヤ・シンワール。Ashraf Amra/APA Images.

(以下の論文はハーニン・アウデッターが『バーベルワド』に「ハマスの哲学：ヤヒヤ・シンワールによる政治学と実存」というタイトルでアラビア語で書かれたものを、レジスタンス・ニュース・ネットワークが英語に翻訳したものである。著者は、ハマスの指導者ヤヒヤ・シンワールの小説『とげとカーネーション』をレンズにして、現在のレジスタンス戦士の考え方を分析し、主体的自立、自己犠牲、治安意識 (security awareness) というテーマを深く掘り下げている。著者はそれらの概念が個人の中に深くしみ込んで、政治的優位性と集団的解放を作り上げていることを探求し、レジスタンスの戦略的・実存的次元を示すと共に、ハマスのレジスタンスのイデオロギー的枠組みの独特な全体像を提示している。)

「我々はシンワールの心の中を見なければならない」というのが現在イスラエル・メディアがスローガンにしている言葉である。ガザのイスラム・レジスタンス運動 (ハマスの) の指導者ヤヒヤ・シンワールが歴史上見事な軍事的・情動的戦略を実行したことを踏まえて、イスラエル・メディアは毎日騒々しく非難報道をしている。シンワールの「アル・アクサ洪水」と名付けた奇襲作戦にイスラエルはいまだに衝撃を受けているのだ。しかし、シンワールの本当の目的は、彼が忠誠を誓い続けているパレスチナ人囚人を救出することであった。彼は、自分も囚人であったが、2011年ハマスの捕虜

となっていたイスラエル兵ギルアド・シャリート等とパレスチナ人捕虜・囚人の交換（「自由の忠誠」取引と呼ばれている）釈放されたこともあって、イスラエル刑務所で拷問などで苦しんでいるパレスチナ人の救出を目論んだのであった。

シンワールは23年間をイスラエル刑務所で過ごし、そのうち4年間は独房監禁であった¹。彼は服役期間を無駄に過ごさなかった。ヘブライ語を学習し、敵イスラエルに関することをできるだけ多く知ろうとした。鉄格子の中から長期的な情報収集計画を練り、実行さえした。それは当時としては遠大すぎた。彼はいろいろ研究し、広く縦横に思考し、それを文章化した。私たちはイスラエル・メディアが言うような「シンワールの心の中を見る」必要はないが、あまり出しゃばらない言い方をすれば、少なくとも「彼の考えを知る」べきだと思う。

「シンワールの心の中を見る」より簡単なことは、彼が長期の孤独と思考と研究の後で筆を執って書いた作品を読むことだろう。

大変な労力と勇気とたくさんの囚人を作り出した複雑で長期にわたるレジスタンス²の後、2004年に彼は『とげとカーネーション』という小説を著した。この小説は6日戦争の1967年から2000年代初めのアル・アクサインティファダ（第一次インティファダ）までの間の歴史的時代のパレスチナ人の闘いと、その闘いの中でイスラム運動—特にイスラム・レジスタンス運動、つまりハマサーが当時の社会的・政治的、文化的背景の中で誕生したことを描いた小説である。

小説はガザの難民キャンプの一軒の家から始まる。そこの子どもたちの価値観と選択を決定づける家である。子どもたちは成人したらイスラム・レジスタンス運動の活動家になるのだ。小説は子どもたちからその親族、隣人、難民キャンプの人々、ガザ回廊、西岸地区、その他の占領地の人々への広がり、その一人一人が当時のイスラム・レジスタンス運動の経験を構成する礎石を形成する登場人物となる。

哲学の器としての歴史小説

小説に登場する人物は架空の人物を主人公にしているフィクションであるが、彼らに関わる出来事はすべて事実である。フィクション部分は、著者が序文で述べているように、小説形態をとらせるために事実部分を変形する必要から生まれた。本来政治的・軍事的人物である著者がこの武装レジスタンスの重要な歴史的段階を記録し、それを創造的な小説形式で表現するのを選択したのは、単なる歴史の記述や事件の羅列以上の方法を試みたからであろう。歴史小説というのは過去の出来事の鏡映ではない。それは歴史の動きを方向付ける思想的・精神的力の深い探査である。歴史小説に登場する人物は自分たちの時代の文脈の中の思想闘争に参加しそれを具象化している。言い換えれば、歴史小説は個々人の考え方と彼を包む広い歴史の広がりの中の複雑な関係を理解する手段として機能する。著者に関して言えば、彼はハマス誕生に関わり、青年時代から現在にいたるまでハマスの形成と発展に貢献してきたパイオニアの人物である。彼が従来の歴史学の制約から離れて、歴史における革新へ向かう劇的な闘いに取り組んだために、彼は歴史の哲学的次元を探査できたのだ。とりわけ、信仰が歴史に与える影響について、ハマスの歴史という文脈の中で、彼はイスラム・レジスタンス運動の哲学を系統立てて説明している。

物語は難民キャンプで生まれたアハマドの視点で展開する。彼はキャンプの中で世界の厳しさ—過酷なキャンプ生活、戦争、レジスタンス戦士の父親の行方不明—に目を開く。彼はキャンプの生活状況

¹ 1988年にスパイ摘発やイスラエル兵殺害の罪で刑期30年を言い渡されが、その上4回分の終身刑という馬鹿げた刑期を宣告された。

² 多分第一次インティファダのことを言っているのであろう。

を改めて観察する — 貧しさと寒さ。夜眠っている時も天井から染み込んで落ちてくる冷たい雨。朝起きて UNRWA の学校へ行っても雨に悩まされる。彼はキャンプの社会生活と文化も観察する。母親が隣人の名誉と評判—とりわけ自分に娘たちに関して—を気にする様子は嫌だった。母親はその点では厳しかった。しかし、祖父と一緒にキャンプ内のモスクにお祈りや集会に行くときは楽しかった。

アハマドはキャンプ、ガザ回廊、西岸地区、その他イスラエル占領地で人々が政治的に変化するのを見た。イスラエル軍が命じる外出禁止令、封鎖、イスラエル軍の容赦ないレジスタンス戦士狩り、集団懲罰を見た。占領の常態化、イスラエル内への出稼ぎ許可で少しばかり得られる物質的不安定の緩和や占領地への訪問許可、それを通じて人々が敵の協力者や内通者に強制されていくのを見た。アハマド自身、彼の兄弟、親族、知人たちが放り込まれたことがあるイスラエルの牢獄を見た。そういう観察と経験の中で、彼は現実を変えるうえで決意と組織の強さが必要であることを痛感した。特に重要な観察は、自由のための闘いと武器は条件に応じて変化するということ、戦士はレジスタンスによって育てられると同時に、戦士がレジスタンスを育てるということであった。彼はハマスの誕生をハマスを形成し、発展させ、それを具象する人物たちを通して見た。それは彼のいとこのイブラヒムに要約されていた。イブラヒムは殉死した戦士の息子で、アハマドといっしょにアハマドの母親の世話を受けて同じ家で暮らした人物で、成人して指導力と政治的決意のモデルとなった。

語り手アハマドは実際に行動する観察者の役割を果たしている。単に観察するだけでなく、実際にイブラヒムといっしょに行動、教育、運動を行っている。イブラヒムといっしょにデモに参加し、アル・アクサ・モスクで宗教集会や学習会を行い、イスラエルの手先となった内通者を摘発する治安活動を行ったが、最後まで正式にイスラム運動の正式メンバーになるのを拒否している。「私は自分を『イスラム・ブロック』のメンバーあるいは支持者とは思っていなかったが、いとこのイブラヒムとその仲間の生き方を共有する生き方をするしかなかった。イブラヒムへの尊敬の念がそうさせたのだ」。

語り手が維持するこの知的距離は、何かを示唆している。アハマドはイスラム運動と距離を置いてその成員にならなかったけれど、その運動の熱心な担い手であるイブラヒムを尊敬し、行動を共にしていたのだ。彼はイブラヒムが表現するすべてを感嘆の目で見て、イブラヒムを彼が所属するイスラム運動体を超越する偉大な人物として語っている。イブラヒムと彼が代表する運動との間のギャップは、イブラヒムを運動を上回る偉大さの形象としている。イブラヒムは直接占領軍と戦闘をしなかったが、小説の最後では殉教者になる。彼は最初から自分の運命を知っていた。妻や子どもへの未練がありながら、その運命を追求したようである。おそらくこのイブラヒムの中に、語り手がイスラム社会運動が社会に作ってほしいと願う状態は象徴されているのだろう。あるいは、著者がハマスの運動が作り出して欲しいと思うパレスチナ人像が象徴されているのだろう — ハマスの目標はパレスチナ人の独立独歩的な自立と、主体的な政治体の確立である。

自立した個人

アハマドが感じるイブラヒムの超越性は、小説の中の二か所で描かれている「自立」という概念につながりがある。この概念は二つの場面で登場する。第一の場面は、イブラヒムは自立的性格を持っているために自らの意志で自らを律する力と目的意識で行動していることを、語り手が気づく場面である。「イブラヒムはプロの建築家になった。彼は友人の建築家から仕事を学び、やがて二人は共同経営者となって建築会社をたちあげ、彼らを補助する労働者を一人雇用した。イブラヒムの自立的性格が彼を一人前の建築家にしたのである。」

言語学的には、自立するという概念は、「自分の先祖や縁故のおかげでなく、自分だけの力で卓越性を獲得した」人間に適用される。この言葉は一般に「自らの努力で成長しようと切磋琢磨する」人に使われる。だから、自立しているということは、哲学的には、個人が自己責任、自律性、知的自由などの原則を忠実に守ることによって、自分の存在と生きることを意味を見出す実存的実践と、見做される。今述べた原則は、個々人が自己主権と自分が希望する運命を形成する探求の旅で、彼を高め・発展させる。

第二の場面は、自立したイブラヒムが本当の指導者となっていく場面である。戦士の自立は占領という状態に立ち向かう政治的指導者にとって根幹的基盤となる。「私の目に映るイブラヒムは日ごとに卓越的になり、みんなから尊敬されるようになった。彼は4歳のときに父親が殉死して孤児となり、母親に捨てられ、私たちの家で私たちといっしょに育ったが、自力で自らをたたき上げ、若い年齢と占領という困難な状況にもかかわらず、グループの指導者となった。」

イブラヒムの自立心が政治的次元で開花すると、彼は指導的人物となる。自分自身だけでなく、コミュニティや人民を発展させることができる人物、集団の状況を高めることができる人物となる。彼は人々を前進させ、困難な政治的状況を克服して自由に向かわせる。語り手はそういう卓越的人物像をイブラヒムの中に見る。イブラヒムは、パレスチナ人民を高揚させるという政治的役割を実践することに自分の存在意味を見出すことによって、自らを上昇させ高める。言葉を変えれば、指導的人物とは、自立的努力を基盤に政治的実践を行うことで、自らと自らの周囲の人々を高めるのだ。

超人と自立した個人

ニーチェは彼の実存哲学で「超人」という思想を導入した。「超人」とは自らの力で自らの運命を形成するという真の自由を完成させた克己的に超越した個人である。ニーチェによれば、超越的個人とは、いかなる社会的圧力にも屈せず、自らの目的を選択し、自らの価値観と原則を持つ個人のことである。この思想は人々をニーチェの言う「力への意志」へ誘う。「力への意志」とは解放と自己主権へ向かう内なる原動力である。従って超人思想は自分たちを縛り妨害する社会の価値観と基準を克服し、自らの価値観を創造する個人という知的モデルを形成する。

これに対して、シンワールが言う超越的個人とは政治的に自力で高まった個人、自分たち民族の政治的解放に貢献する形で自らの人生目標を選択した個人のことである。だから、彼らは自分たちを保護してくれる社会的・政治的仕組みの内部で自分たちのアイデンティティを形成し、自分たちの価値観を規定する。このプロセスは個人としての自由の探求だけでなく、自分が属するパレスチナ・コミュニティ全体の自由に貢献する形で集団的アイデンティティを構築しようとする政治的行動でもある。

政治的に卓越した個人は、自立の哲学を通じて、自分が相続する社会の価値観 — 社会的・倫理的・宗教的 — を、解放へのコミュニティに原動力を高めて、それを政治的優位性を達成ための資源にする実践的人間のモデルである。彼らは、占領への戦いが実存のための戦いであり、パレスチナ人の「力への意志」に基づく戦い — つまり、政治的自決を目指す戦い — であることを理解している。

この文脈の中では、自立の哲学は自分個人の自己決定の実現を超えて、もっと大きな政治的言説の形成に貢献し、それに影響を与えるツールとなる。解放という目的を実現しようと懸命に活動する個人は、他人のあらゆる活動を目的実現の動力源として活用する。イスラム・レジスタンス運動の場合は、イスラム教の価値観を通して、この超越的個人を生産し、パレスチナ人のあり方を創造する。それはどのようになされるのであろうか？

「家の中は家族の男、女、少年、少女でいっぱいになった。小さいが私たちにとって大きすぎる家に子どもたちが集まっていた思い出が洪水のように蘇ってきた。いつの間にかうちの家族は小軍隊になったね・・・」と私は冗談半分に言った。母親がすぐに『預言者を祝福しなさい』と叫んだ。私の言葉を忘れないようにとの優しい忠告であった。そのとたん、家族のみんなが『アッラー、我々の指導者ムハンマドに祝福を！』といっせいに祈った。」

イスラムと自立した個人

この小説は、ナクバの少し前、ガザがエジプトの統治下にあった1967年の冬から始まる。アハマドは当時5歳だった。彼は最も古い思い出を語る。アハマドはエジプト兵のところへよく遊びに行った。エジプト兵たちは彼と遊んでくれ、彼と彼の友達にピスタチオのお菓子をくれた。やがて戦争が始まると、エジプト兵は遊びに来るな、と怒鳴り、お菓子もくれなくなった。

「ある地区の人々はシオニスト入植者軍に対して激しく抵抗し、入植者軍は撤退した。その後暫くして、エジプトの旗を掲げた戦車と軍用ジープがやってきた。レジスタンスの人々は救援部隊が来たと思って、喜び勇んで塹壕や隠れ家から飛び出し、銃を空へ向かって発砲して、歓迎の意を表した。しかし、近づいてきた部隊はレジスタンスの人々に発砲して、殺害した。その後エジプトの旗に代わってシオニストの旗が戦車に掲げられた。」

小説のこの箇所はパレスチナ人の闘争の思想的転換を示している — アラブ民族主義への失望、あるいは、特に入植者占領軍の貪欲さを前にして、アラブ民族主義はパレスチナの大義に対する個人に必要とされる真剣さを導き出す政治的潮流としては不十分であるという認識が、個々のパレスチナ人の中に芽生えたのだ。

自立した個人という哲学は精神の高揚の一条件 — 真剣に目標追求に身も心も捧げること — となる。「自立した個人は尊敬と信念をもって自分の目標を見つめ、妥協することなく最大限の真剣さでそれに取り組む。彼らは為さなければならないことを一心に行うのだ。」そこに、「宗教と民族主義が類まれに結合」し、ジハード、つまり聖戦の決意が生まれ、民族的大義に神の教えが染み込み、そうなることで個人の中に目標遂行に必要な厳格な真剣さを植え込むのである。語り手は「かくて戦いは本格的となり、必要な基準を満たす」と述べている。

政治的に自立した個人があたりを見回すと、占領軍がもたらすソシオサイド (sociocide) と言われる社会の崩壊、つまり社会の殺戮に直面する中で超然と構える組織の中に、イスラム組織があるのを見る。政治的実践と信仰の絡み合いの中に、パレスチナ人の存在と目的をアッラーに祈る中に、敵が解体できない一つの原則を見る。自立した個人は、歴史的イスラムの中に、入植者占領軍がパレスチナ人意識を腐食させ、進むべき方向をゆがめるのにがんと抵抗するしっかりした政治的組織を見るのだ。それゆえ、戦いを「文明の戦い、歴史の戦い、生存のための戦い」と呼ぶイブラヒムは、若者たちを彼らがまだ知らない場所やイスラムの歴史的聖地、例えばアル・アクサ・モスクへの旅に連れてゆくのだ。それらはパレスチナ人の文化の繁栄、パレスチナの自己主権、パレスチナの地の運命の形成が具象化している場所である。

そこではアル・アクサ・モスクの建築や岩のドームが、パレスチナ人が監禁されていること具象化している難民キャンプとはまったく対照的に、威風堂々と立っている。だから、ハマスはパレスチナの大義を不滅のものとする聖なる歴史的意味を込めて、アル・アクサを特に強調するのである。預言者ムハンマドが岩のドームから天へ旅立った「イスラとミラジ」夜の旅に象徴されるように、パレスチナの地と天とを繋ぐのである。おそらく、パレスチナ囚人を取り戻すために仕組んだ10・7奇襲作戦を「アル・アクサ洪水」と名付けたのはそのためであろう。それは囚人解放の使命をはっきり示

し、パレスチナ人を自由にすることが神が自分たちに与えた意味であることを強調する命名であった。イスラムは政治的闘争をアッラーと人間的存在の意味に結び付けるが、この結びつけは戦いに来世とかアッラーからの報酬といった崇高な意味づけ以上の意味がある。では、その意味は政治中心の生活を実践する個々人にとってどのように表れるのであろうか。

苦行・禁欲

この小説はハマス誕生の歴史で「教育と準備」の段階に特に注意を払っている。ある日のこと、語り手と同じくアハマドという名の長老が、難民キャンプの中の道路でぶらぶらして遊んでいる10代の若者たちのそばを通った。長老は若者たちに無駄な遊びをやめてお祈りや神に対する崇拜や瞑想をせよと説教した。「これらすべてをイスラムの将来、パレスチナの地にその旗を掲げるべきイスラムの将来に結びつけよ。」という説教であった。その後長老は数十年かけて若者たちと過ごし、彼らを教育し、禁欲と世俗的煩悩を拒否して来世を崇めるイスラム価値観を教え、「犠牲と自己犠牲ができる」世代を作り上げた。

多分この小説の愛に関するテーゼは、イスラムの言葉で自己と「世俗生活」との最も強い結合を表わしており、この禁欲が政治的实践を通じて存在の意味を高めることを紹介しているのだ。語り手は「私は安堵感でいっぱいになった・・・これが愛なのか？・・・後になって私は自分の好きな女性が大学へ行くのを遠くから見送るだけで満足するようになった。それ以上のことを望まなかった。一目見ることも望まなかった。ただ愛するだけで十分で、彼女がそれを理解してくれるだけで十分だった」と書いている。アハマドは自分だけの世界で愛することで満足し、「子供のころに言い聞かされていたように」、愛の達成を相応しいとき、自分がプロポーズできるときまで待つことで満足した。彼はいつももっと大きな愛のことを聞いているので、恋愛の必要を感じないのだ。

イブラヒムは、自分も愛を知っていることをアハマドに語る。自分が民族解放闘争の一部だという自覚があったので、愛に執着しない決心をしたのだ、と説明する。「アハマド君、愛し合うという気高い関係が内通者によって占領軍に通報されて、それが第一の愛、アル・クッズ（エルサレム）を放棄するように画策された卑劣な罠や鞭に利用されるのだ。我々のような生活をしている人間に愛と情熱の余地はあるだろうか？」と言った。イブラヒムは、イスラムの教えの徹底的な禁欲が政治的生活の中に反映していることを説明した。イスラムの教えで育った故に、人は自分の愛や欲望が民族解放事業の障害となったりそれを危険にさらすと感じたときはいつでもその私的感情を捨てるのだ。民族解放こそが自分の人生に中心的意味を与え、自分の心の底からの願望であり、彼の人生と生活のすべてを形成する基礎だという考えが人の心に作られるのだ、とイブラヒムが説明した。

こういう愛に関する議論があった後で、イブラヒムは自分の大の親友で学生運動の同志だったフェイズが実は占領者の内通者だったことを知る。「アハマド君、我々の生活で普通に愛や友情などを大切にできる生き方ができるのだろうか？我々の物語は厳しいパレスチナの物語で、そこには私的な愛や友情に耽る余裕はない」と、イブラヒムが語った。パレスチナ人の生活は厳しく、占領者の意のままにいつでも消えてなくなる不安定なものだ。だから、政治的解放に基盤を置かない私的な意味や価値観は幻想であり、そんなものは占領者が付け込む弱みとなる。大切にしていた友情さえも信用できないのだから、とイブラヒムは語った。

おそらく、アル・アクサ洪水の戦いを契機にしてイブラヒムと同じように考えたパレスチナ人がいるだろう。「イスラエル」社会内で暮らし、「イスラエル」人と共存し、「イスラエル国籍」を持ち、「イスラエル」法に従って生活しているパレスチナ人である。彼らは少しでも本当の自己を見せる行動をすると、つまり、カザの子どもたちに人道的感情を吐露したり、イスラム教徒としてのアイデン

ティティを見せたりすると、たちまち共存、市民権、法律といったものが裏切られ、迫害される。SNSでコーランを引用しただけでテロ容疑で告訴されて人もいる。仕事を失い生活を奪われた人もいる。何しろ、敵の社会と制度に依存して生活しているから、そうなるのだ。パレスチナ人的なものを少しでも見せると、排除される。そのため、生活や市民権を維持したいために、自分たちの政治的尊厳を放棄する者も出てくる。

この小説は、パレスチナの大義である解放のために自己犠牲する意志を破壊する根本的な要因 — 私的救済と安定への誘惑 — を様々な形で取り上げ、対処している。シオニスト占領者は私的欲望や自己保存欲求を政治的・軍事的投資の対象として、育てて利用することをこの小説は説明している。したがって、この小説は敵への協力者・内通者問題を、さまよえる私的欲望と抑圧激化の産物と診断している。語り手は10・7以前にあったガザから「イスラエル」への越境許可について語っている。それは出稼ぎで生活を支え、子どもたちを食わせる必要から生まれた現象で、個々人の生活を援助したと同時に占領者社会の安定化と繁栄を支えた³。このイスラエルが発行する許可証は、やがて、封鎖されたガザの貧困から逃れ、物質的に余裕のある生活への誘惑として、イスラエルが政治的に利用した。ひどい場合は、「イスラエル観光旅行」の許可証を販売する観光会社も出てきたことがあった。

「有名なイスラエル協力者が経営する観光会社が、イスラエル当局から許可証をもらって、グリーンライン内（西岸地区占領地）見学を企画したことがあった。その見学旅行に参加した若者に名所や施設を写真に撮らせた。協力者はそれを敵のためのスパイ活動だとして、イスラエルに協力しなければ、ハマスにばらすぞと脅迫した」。

語り手は、「苦しい現実とそれから逃れるための要件・必要と民族解放の政治的理念」の間に大きなギャップがあることを認める。しかし、そのギャップは、自分の前進と自分が属する社会の前進のために、自己犠牲という政治的投資によって埋めなければならないと、語り手は言う。つまり、個々人を自己犠牲を厭わない人間として教育しなければならない。

「イスラエル」へ出るエルツ・ゲイトのパレスチナ側検問所で出国を拒否された労働者は、自分には子どもが8人いて、子どもたちに食事を与えなければならないと、必死になって出稼ぎを認めてくれるように訴えた。UNRWAの救援では不十分で、子どもたちはいつも空腹だ、と訴えた・・・レジスタンス戦士（フェダウィーン）は彼の訴えを退け、許可書を取り上げた。しかし、戦士の目から涙が流れていた。悲しみを抑えて、戦士は許可書を破った」と小説が書いている。

犠牲と自己犠牲

イブラヒムは早くから高等教育による人生の前進のためには金が必要であることを認識していた。彼は建築専門職の友人といっしょに働きながら建築学を勉強し、そして、ついに自分も建築専門職となり、請負業者となった。イブラヒムは学校卒業後の進路選択では、外国の大学へ行く進路を拒否し、ガザを出て西岸地区のビルゼイト大学へ行くことも拒否した。ガザのイスラム大学、当時は自前の建物などなくてテントで授業をしていた地元大学へ進学した。義理の叔母はイブラヒムの進路選択に反対し、イスラム大学なんかはまともな教育機関でないのだ、いところと同じように外国の大学へ行ったらどうだと勧めた。しかし、彼はイスラム大学を選択した。学費がビルゼイト大学の半分ですむし、ましてやエジプトの大学で勉強するよりもはるかに安くつく。シオニスト占領軍は大学を包囲し校舎建設をさせなかったが、「知識と教育を求める人々の意欲を止めることはできなかった」。イブラ

³ ガザ封鎖以前は、イスラエルとガザの間にあるエレツ・ゲイトと呼ばれる広い検問所は、早朝と夕刻、出稼ぎ労働者の列でいっぱいであった。パレスチナ人の低賃金と重労働と不安定雇用はイスラエルの経済発展に大きく寄与した。

ヒムはもちろん、アハマドを含めて他の若者も、テントとヤシの葉の掘っ建て小屋のイスラム大学で勉強した。「イブラヒムは大学生であり活動家であると同時に建築業者であった。彼と何人かの立派な学生は、我々数百人もの人たちに手伝ってもらいながら、講義室を建設し・・・占領に対して新しい事実を創造した」。

イブラヒムは自分が蓄えた金をイスラム大学建設に投資した。また、稼いだお金を政治活動に使う自動車の購入のために貯蓄した。金だけでなく、大学という名に相応しい基準に合う教育機関にするために、イスラム大学の建設と発展に労力を注いでいる。私的安寧や世俗的出世を犠牲にして、家族とコミュニティのために献身している。個人が私的欲望を超越して政治化するとき、彼の実存は必然的に集団救済と結びつく。数限りない拘束で圧迫されている集団的状况の改善に向かって、全存在をかけた努力に没頭するのだ。そのために必要な機構や制度の形成やインフラの創造といった大きな事業など、自分たちを取り巻く現実変革に専門家として取り組んだ。

ついにイブラヒムは、通学費用や学費を支払う経済力がないために教育を断念せざるを得ない人々に高等教育機会を提供する教育機関を創りあげた。こうして彼は、何世代もの人々を無知や無為から、あるいは敵の金銭的誘惑に乗って内通者になるかもしれない運命から救った。さらに占領者に挑戦して、イスラム・レジスタンス運動（ハマス）の価値観と原則で若い世代を教育する学習機関設立に金とエネルギーを注いだ。その学習機関は民族解放的政治活動の中核となった。小説は、自己犠牲の価値観で育った人間が、自ら進んでパレスチナ民族の願望に実現に必要な政治活動を行う自発的で独立した個人になっていく事例を描いている。自立した個人が、パレスチナ人と解放運動の関係を説くイスラムの教えの基本的原理である。

レジスタンスと政治的優勢をえる技術

イブラヒムにはハッサンという名の兄がいる。ハッサンは早くから私的救済の道を選んだ。「テルアビブ」へ逃げて、「イスラエル人」女性と暮らし、その女性の父親の工場で働いた。しかし、父親の工場が破産し、女性がハッサンをアパートから追い出した。彼はやむなくガザへ戻り、難民キャンプで暮らした。しかし、私的救済に余念がない彼は結局内通者となり、コミュニティにとって墮落分子となった。これはイブラヒム一家の不名誉となり、パレスチナ社会と大義に破壊、下落、政治的悪化をもたらすものとして、イブラヒムを困らせた。ある日のこと、アハマドはイブラヒムの書類の中にハッサンに関する詳細な報告書を発見して驚く。アハマドは「この報告書は年少者や素人が書いたものじゃない。経験豊富な人間が書いた専門的な報告書だ」と言った。報告書は、ハマスが高度なパレスチナ情報機関を開発し、イブラヒムがその一員であることを物語っていた。自分が兄ハッサンに直接つながっていることが動機となって、イブラヒムは内通者を見つけ、彼らのスパイ活動や「イスラエル」への協力方法などを調べる総合的治安システムを開発した。敵にそのような治安システムがあることを知られないようにして活動した。最終的にはイブラヒムはハッサンを殺したが、敵に知られてはまずいことを知っていたから、殺害証拠を一切残さないような形でハッサンを抹消した。

この小説は、どんなものにせよ一つの政治的組織を構築するためには、人は自分を取り巻く現実のすべての面をしっかりと把握しなければならないことを、イブラヒムの治安システム開発に即して述べている。政治的実践の連続性を確保し、またそれを確実に保護し、育成する知識が必要である。例えば、「鳥」という概念を説明している。「鳥」とは敵占領者がパレスチナ人囚人の中にこっそり置いたスパイのことで、囚人の会話から情報を引き出したり、拷問で情報を引き出すのを助ける役目の人間のことである。もし、アハマドがこの言葉を知らないで占領当局に捕まったら、自分では知らないうちにイブラヒムのハッサン殺害を当局に知らせ、内通者を捕らえて調査するイブラヒムが作った機関

の存在を当局に知らせてしまう失策を犯すかもしれない。コミュニティの安全とレジスタンス運動の発展に貢献しているイブラヒムの戦いを潰すことになるであろう。こういう言葉を知っていると、人々は占領者の尋問を受けても、事前に打合せをしなくても、仲間を売らないように首尾一貫した話ができるのだ。

それゆえ、この小説は、このような治安意識をパレスチナ人に教育を通じて植え付けることを述べている。治安意識とは、自分の中で生まれる安全意識で、自分だけでなくパレスチナ民族とその解放運動を危険にさらすのを避ける感覚、嫌なことが起きる前にそれを予測できる要因や状況の知識のことである。こういう治安意識を各個人の中に植え付けることで、その個人と彼が属するコミュニティ全体を守り、コミュニティの解放闘争を促進させるのである。解放闘争に関わっていない人々が解放闘争に関わっている人々を我知らずに危険に晒すことをも防止できるのである。治安意識は個々人間の直接的接触や会合をしなくても、組織行動や協力的行動ができる羅針盤の働きをする。直接的接触をするとどうしても敵の目につく。だから、一般人が治安意識を持てば、敵に見られないで、組織化や闘争予定が立てられる。みんなが沈黙を守り、みんながこっそり支援・協力する。その協力が敵に見つかると、たちまち逮捕され、牢獄へ入れられるか、殺害される。アハマドはイブラヒムほどジハード（聖戦）に熱中していないかもしれない。実際、小説の著者シンワールもレジスタンスへの貢献度は人によって能力を身につけるペースや運動における役割などの差があることを認めている。しかし、治安意識は共通項として絶対に必要として強調し、非戦闘員などの一般人の治安意識がハマスの政治的卓越性の基盤であるとしている。

たぶん、この小説自体がそういう治安意識をパレスチナ人の間に植え付けようとする試みであろう。この小説では、レジスタンスの過程や状況や方法、レジスタンス戦士の経験や失敗、内通者のやり口や具体的行動、あるいは内通者がいかに形成され、強制されるかが詳しく書かれている。小説の著者が強調する治安意識はガザの子どもの態度に見事に表れている。隠しカメラで撮影された番組での子どもへの尋問風景を見ると、トンネルやハマスの軍事拠点に関する質問に答ええないし、議論することさえ拒否し、固く口を閉ざしている。パレスチナ社会の治安意識を見事に体現しているのだ。イブラヒムはパレスチナ社会を「連続する上昇体」と呼んでいる。彼の説明によると、パレスチナ社会は「ずっと継続しているインティファダを支える形で」日常生活を送っている、つまり、「インティファダがパレスチナ人の生活様式のバックボーン」—生活活動のすべて、例えば出産という家族作りもインティファダの戦士作りとなるような基礎活動となる。そのような生活のあり方は、パレスチナ人が自分たちの生活主権を獲得するまで、レジスタンスを続けて拡大する能力を供給する社会を築くということなのである。

ニーチェは自分の実存哲学で、個人は自分が満足する形で自分の人生を送れと勧めている。一つのライフサイクルを永遠に繰り返さなければならないとしたら、人は自分が創造した人生の繰り返して満足するだろう、何故ならそれが彼に優位性、自由、自己主権をもたらすからである、と言った。同じように、シンワールがハマスという政治的事業とビジョンの中で提起した実存思想は、いつでもどこでも、自分の状況と能力に応じて、自主的にレジスタンスを実践する個人の創出を目的としている。

このような文脈の中で、この小説はレジスタンスで使用する武器、レジスタンスにとって一番厳しいテーマである武器について語っている。初めは子どもの投石から始まり、様々な職業の若者が工夫して開発した武器へと進化する。例えば、学生時代のヤヒヤ・シンワールは化学の本を読み漁って爆薬を作る化学反応式を探した。彼は爆弾ベルトや自動車爆弾を発明し、爆弾ベルトは後に殉教作戦

(自爆攻撃)に使われた。その後、戦士たちの経験や工夫や開発を通じて、ついにハマスの軍事部門カッサム旅団が長距離飛行できるロケットや大砲を開発した。

シンワールは、個人の中に禁欲、犠牲、自己犠牲、治安意識などの概念が存在するからこそ、外部からの圧力でなく自らの意志でレジスタンス、つまり占領者に抵抗する意志が生まれるのだと信じている。彼は、レジスタンスは個々人が自分たちの政治的自由、それを実現する道のビジョンへの関与、それに向かう計画的な前進に、それぞれ自分の状況と能力で可能な範囲で、たとえどんなに困難で目標はるか遠くに感じて、自分の責任を果たすことから始まると考える。

シンワールは「イスラエル」監獄で426年の刑期からレジスタンスの活躍で解放され、自分が学習して身に着けた哲学を応用して、パレスチナ史上まれな大変革 — 遠くの目標への長期的計画 — を指導した。彼の偉業は「イスラエル」メディアから「最大の軍事的・諜報的戦略」と呼ばれたが、それはシンワールが服役中に敵の原語を修得し、敵を巧みに操ることを学習したものを使って、いつの日か出獄したら敵に立ち向かうと思っていたことを実行したものである。それは彼が描く「抵抗中の自立的人間」哲学の表現である。「抵抗のエンジニア」というニックネームを持つヤヒヤ・アヤッシュ（1966～1996）⁴の言葉がそれを雄弁に表現しているかもしれない。「奴らは私の肉体をパレスチナから引き抜くかもしれないが、私はパレスチナ人民の中に奴らが根絶できない大切なものを植え込むのだ。」

この記事は、レジスタンス・ニュース・ネットワークによって元のアラビア語から翻訳された。

t.me/PalestineResist で彼らをフォローし、現在進行中のレジスタンスに関する最新情報を入手しよう。

⁴ ハマスの主任爆弾製造者で、彼が指揮した自爆攻撃で約90人のイスラエル人が死亡したと言われる。1996年にシンベトに暗殺された。